

「小さな親切」運動静岡県本部賞

やさしいことば

長泉町立長泉小学校 二年

宮口 かほ



わたしは、夏休み三日前に、りんごびょうようになりました。ほつぺたがまっ赤で、パパもママもびっくりして、夜にきゅうきゅうびょういんへ行きました。先生に、「りんごびょうだよ。」と言われて、ほつぺたがまっ赤だからなっとくしました。つぎの日は、学校をお休みして、もう一どいつも行っているびょういんへ行きました。やっぱり、「りんごびょうだよ。」と言われました。くすりをのんでも、ほつぺたの赤いのはすぐになおりません。どんどん、足や手が赤くなってびっくりしました。しゅ

うぎょうしきの日、ひなたちゃんがてん校してしまうから、おわれ会があります。だから、わたしは学校へ行きました。まだ、ほつぺたがまっ赤で、ぼうしをかぶりました。日にあたるとかゆくなるから、ママが学校まで、車でおくつてくれました。げたばこで、そうまくんに会いました。わたしは、ほつぺたがまっ赤で見られるのがいやでした。そうまくんが、のぞきこんできて（どうしよう）とおもいました。そしたら、「りんごびょう？かわいいよ。前よりかわいいじゃん。」

と言われました。わたしは、すごくうれしくて、きょうしつに行けました。そうまくんのことばで、わたしはこころがかるくなりました。わたしも、友だちにやさしいことばを言えたらいいなあとおもいました。

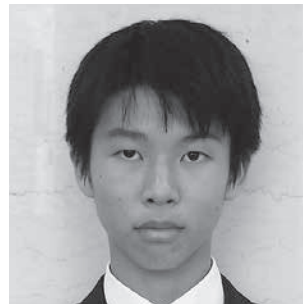


「小さな親切」運動静岡県本部賞

親切でつながる世界

静岡県立浜松西高等学校 中等部 二年

宮本 恭太朗



いつものようにバスに乗り、座席に座った。混んでいたこと以外は普段通りで、見慣れた顔の人が次々と乗り込んできた。乗車して三つ目のバス停に停車したときもまた同じようにいつものおばあさんが乗車した。そのおばあさんは大抵優先席に座るが、既に三つの優先席は座られていた。揺れるバスの中で一般席に座ることすらできず、僕の隣で立つことになった。席を譲ろうと思いい、その場を立った。しかし、おばあさんは僕に座るよう指示した後でこう言った。

「私は元気だからまだ座っていなさい、学校まであと少しだし。あなたが降りた後で私が座らせてもらおうから。」結局、その場で席を譲ることはできなかった。ただ、僕の心には不思議な感情があった。それは親切を断られたのに、全く不快感が湧かないことだった。まるで親切に親切を重ねられたように。今までに人の親切を断ったことがあっただろうか。断れば相手を傷つけてしまうだろうし、お互いにその親切が「ありがた

「迷惑」に変わってしまうだろう。しかし、このおばあさんの断り方は僕自身、傷つけられたように感じなかったし、また、おばあさんも「ありがた迷惑」と感じていないことが僕にも伝わってきた。最高の断り方だと思った。

きっとおばあさんは僕に気を遣ってくれたのだろう。今回は学校までの距離が近かったため、つい、おばあさんのその言葉をうけとめてしまったが、初めての返答に心を大きく動かされた。一語一語に、優しさがあった。あの時、譲るべきだったのかなど考えることもあったが、やっぱりこれでよかったのだとも思う。

今までたくさんの人からいろいろな親切をうけてきた。あのおばあさんのように親切をくれた人に気の利いた一言を言えるのも、親切の一つだと思う。親切に親切が重なったことで、バスの中の空気が変わったように感じた。

今でも毎朝、そのおばあさんは、同じバス停から同じバスに乗ってくる。そして、優先席に座るのだ。何も変わらない普段通りの日常だけれど、一つだけ違うのは、僕とおばあさんが「親切でつながっている」ことだ。おばあさんは覚えていないかもしれないけれど、僕はそんな感じがしている。

そんな日常がたくさんあることで、地域から世界まで、幸せが積もっていくのではないだろうか。そんな幸せのかけらを、

そして親切のつながりを、たくさんつくっていきたくて心強く思った。

